文政三年庚辰六月当座

池辺之蓮歌

水無月や池に
汀風くるゝ夕信の□子文
当も秋なる蓮乃
風升てすゝし 青垣
そのゆふべ門升
茶ふく人もなし 禾本
起て子借の 芸
極ふるく川堀素縁
胡六の俺しるし
あれ具居明に艸龍
擬にまきすきぬめ
露のまつまも
子文

静さや魚つゝと
泊りて夜る時　随
竜のましめと　木
進と渡りゆく世を
三味線を憎む世を
隣の芸者に理　棠
十夜半帯干に
傍のこしのうけ　諸
もの日打く
めでたき好
酒呑夜　文
少しひ用
十両と出ふ
ゆ年をはふから　随
惜世の暮の　木
倒して
出て気ます　棠
霜相の行る隠
くれ志てぬ男人を
待りぬる様侘ひ　諸
おりる半ちます
まきはひたる
京風子
おわくも花の巣二
よりもちみを掛る　文慶
たとの好
をのへの芸　随
学のこしの庭根を
芦の茎ふ春日影　木
棠

よしもなきと抽ふ
枕の人の萩
木

芋の戸の庵根を
蕗の芽の子春霞　梁
一夜中とうとう
也寄のうりん閏　紅
けふも猿が　しれし
柳ふく仕業して　文
国の　秋くうち
白ゝそ　まくよまご
命もり　ばと暗く乃　恒
延ぬそ不審なる　本
捨すくまゝ　あり
巣まうし　はかなき　梁
もれ　其ハ無言の
袖の女の名を尋し　紅
伸　声なき　文
志ぬけ河ふり
時　合へと食乃　恒
恨もと知りけり
聞ふ　事をなす
夕ゝ　あふ　本
後夜香も中　ちあ
朝を　宵夜　梁
音ふ　ちそうのよ
捻さはよき　紅

七くちから折ふし
学ばるゝ秋の魂 文
志りゐるまゝり
本戸の明きに 庵
体達のあんき乃
ゆるを仰の後 本
眠りをとりけす
蟠るの青ぶち 梁
義の手をと一様
ろりけるゝ上元子 紀
ちうつる 楳にと
長にふあるゝ
醉 桃 筆